

科学研究費補助金研究成果報告書

平成24年6月7日現在

機関番号：32606
 研究種目：基盤研究B
 研究期間：2008～2011
 課題番号：20320039
 研究課題名（和文）戦争をめぐる表現と表象 日本近代文学・日本映画に関する中仏との比較研究
 研究課題名（英文）Expressions and Representations of Modern War : Comparing Literature and Cinema in China, France and Japan
 研究代表者 中山 昭彦（NAKAYAMA AKIHIKO）
 学習院大学・文学部・教授
 研究者番号：80261254

研究成果の概要（和文）：

本研究では、第二次世界大戦を中心とする日本の近代の戦争において、国家や民族の危機といった言説がメディアを通してどのように広まり、どのようにクリシェ化されたかを、中国、フランスの場合との比較を通して明らかにした。またその一方で、日本の文学作品や映画が、危機の言説を批判する可能性を秘めていたことを、文学と映画の表現といった点から究明した。

研究成果の概要（英文）：

Through a comparative study of China and France, this research demonstrated how a discourse on the crisis of nation and ethnicity spread through the media and became clichéd by focusing on modern warfare in Japan during WWII. On the other hand, from the perspective of literary and cinematic expression, this research also determined that the hidden potential for Japanese literary works and films to criticize the discourse on the crisis of nation and ethnicity existed at this time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2009年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
総計	11,300,000	3,390,000	14,690,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：映像表現、言語表象、日本近現代文学、フランス文学、中国映画、危機の言説、戦争映画、戦争トラウマ、

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二次世界大戦をはじめとする近代日本の戦争における言説を批判的に検討し

た研究は数多く存在するが、特に国家や民族の存亡の危機といった言説に関する検討が十分ではないこと。

(2) 第二次世界大戦をはじめとする近代日本の戦争における支配的な言説に対して、抵抗の不可能や困難を強調する研究は多いが、抵抗の潜在的な可能性を、文学や映画の表現にまで遡って分析したものが皆無に近いこと。

2. 研究の目的

戦時下の文学と映画は、結局のところ戦時体制と共犯的な表象のモードを作り出すだけなのか。本研究の一部として実践される表象のモードの既存の研究はまだ不十分であり、また重要であることに変わりはない。とはいえ文学と映画はその巨大な渦の中に飲み込まれ、それに貢献するだけなのか。確かに個別的な作家や監督による抵抗は従来の諸研究でも明らかにされてはいるが、そうした抵抗を、同時多発的に起こる文学表現と映像表現の大きな変動という視座のもとに看取することは出来ないのか。それが本研究の出発点をなす問いであり、また最終的な目的を指し示す疑問といえる。つまり、戦時体制下のイデオロギーや検閲とともに生み出される規範としての表象のモードをいっそう明らかにする一方で、モードとして至るところに流通する表象をすり抜け批判しつつ、それとはまったく異なる表現が創始され、それが同時多発的なうねりを生み出す局面を明らかにすることこそが、本研究の最終的な目的となる。表象と表現とが区別され、その関係が問題化されるのもそのためであり、とりわけ個人的な抵抗を越えたうねりを意味する表現の分析が、本研究を最も特徴付けるものとなる。

本研究は、このような関心から、第二次大戦を中心とする日本近代の戦争と映画・文学との関係を、同時期のフランスおよび中国における同じ領域との比較において明らかにするものである。

3. 研究の方法

(1) 第一の方法は、詳細な作品分析であり、ここでは特に表現と表象のモードの区分を明確にするとともに、作品の分析に必要な方法論の探究を同時に行った。特に表現とは、ジル・ドゥルーズが『差異と反復』や『スピノザ表現の問題』で提起し、『褻』において発展させたものであるが、本研究では、この概念と方法を究明しながら、テキスト分析やナラトロジーとの接合の可能性と不可能性を十分に吟味し、作品分析の基本的な方法を定めた。

(2) 一方、モードとしての表象の分析には、表現との区分を明確にした上で、精神分析の諸理論とミシェル・フーコーが提起した言説分析が、批判的な継承も含め

て応用された。更にイデオロギー分析なども場合に応じて用いられた。

(3) 表現および表象のモードを明らかにするための資料収集に関しては、文学の分野においては、特に従来の研究の手薄な分野を主な対象として推進された。フランスのヌーボー・ロマンや中国の戦時下と戦後の小説も広く収集し、映画の場合は、日本の映画、特に戦時下の映画を中心に、世界各地から日中仏映画のDVDやビデオを収集した。これらの作業は研究代表者と研究分担者の緊密な連絡のもと、それぞれの専門分野の知識を生かした分担を決めた上で遂行された。

4. 研究成果

(1) 表象のモードの問題として、それぞれの国家や民族の危機をめぐる言説が、メディアを通して流布しクリシェ化されていく様態を明らかにした。日本においてはこうした言説が家族の危機として表明されることが多く、戦時下で喧伝された家族国家観との関わりの深さが認められるのに対して、フランスにおいてはより直接的な生命の危機が、中国においては財産の危機が問題なることが多いことを究明することができた。またこうした言説のクリシェ化は、文学や映画にも浸透しており、特に映画においては日本の母もの、中国のメロドラマ、フランスの対独レジスタンス映画などのジャンルにそうした特質が特に色濃く現れていることが分かってきた。更に危機の言説は多くの場合、危機やそれが招く混乱に対して主体を確立する爽快感と表裏一体であり、危機の言説の広まりとクリシェ化が、主体形成の政治学と密接に関わることも、こうした分析から照射された。

(2) 危機の言説を中心とする表象モードの流布とクリシェ化に対する抵抗の可能性を明らかにするための基礎作業として、戦時下に公表されるか、或いは戦争中に準備された映像表現と文学表現の特質と、国家を超えた通底性を解明した。特に日本におけるマキノ雅弘、成瀬巳喜男、小津安二郎などの映画監督による実践が、フランスの戦時下におけるジャック・ベッケル、ロベール・ブレッソン、マックス・オフルスなど、戦後のヌーヴェル・ヴァーグを準備した映画作家の表現と通底しており、また戦時下において大岡昇平、坂口安吾、中村光夫、花田清輝、武田泰淳らが個別におこなった外国文学研究が、これらの作家に新たな文学表現の創造を可能にした経緯がわかってきた。また戦後に発表

された映画と文学およびその他の戦争を対象とした映画・文学に関しては、日本における 成瀬巳喜男、吉田喜重、森一生、宮崎駿などの映画作家による戦争の表現が、ジャン・ルノワール、ジャン＝リュック・ゴダール、エリック・ロメールなどのフランスの映画作家のみならず、陳凱歌、張芸謀などの中国第五世代の映画作家および侯孝賢などの台湾の映画作家と密接な関係にあることが明らかになった。また福永武彦、中村真一郎、大岡昇平、野間宏などによる戦後の小説群が、戦争の記憶といった題材のみならず、時間や空間の表現やレトリック、運動の描写などにも通じる躍動と停滞を繰り返す身体表現においても、クロード・シモン、マルグリット・デュラスなど、フランスのヌーボー・ロマンの小説と、単なる影響関係を越えた親和性をもつことが突きとめられた。更に戦時下から戦後に通じる記憶の探究として、横光利一や川端康成の小説が、野間や大岡の戦後文学の記憶の表現と部分的に重なることを示すことが出来た。

(3)(2)における詳細な表現の分析の結果、戦争における危機の言説への抵抗可能性の性格が解明された。その抵抗可能性の第一の性格として挙げられるのは、ストーリーの因果性を狂わせることであり、因果性を現す部分を不自然に省略したり、過剰に誇張したり、或いは性質の異なる因果性の複数の候補を混淆したりする手法によって、こうした事態が生じることが明確になった。これにより、家族や生命が脅かされるといった国家や民族の危機に通じる出来事がストーリーとして展開されたとしても、その原因が納得し難いものとなったり、逆に原因が十分に結果に受け継がれなかったりするといった事態が生じることになる。たとえば、さしたる原因が描かれていないのに家族愛の危機が過剰に叫ばれるといった場合や、家族を脅かす敵の接近が誇張されて描かれているにもかかわらず、それを感じるべき人が極端なまでに無反応だったりする場合はこれにあたるが、いずれにしてもそれは、原因と結果としての出来事の間で齟齬がみられる現象といえる。そして、そのような齟齬こそ、危機を正当化する言説に疑いを生じさせる抵抗可能性を生むものに他ならない。映画の場合は、そうした抵抗の表現が、表象のモードに乗った作品であれば当然あるはずのシーンの省略、クローズ・アップやリヴァース・ショットの回避ないしはその過剰なまでの情動的誇張などの表現によって実現され、文学作品の場合は、記憶の混乱ないし断片化として主題化さ

れることが明らかになってきた。

また第二の点として挙げられるのは記憶の断片化や混乱にも通じる時空間の曖昧化であり、いまここにあることによって身に迫る危機の感触から、いまここを剥落させる手法が様々な形で展開されていた。文学作品の場合は、断片化された記憶のバラバラな配列や、いつこのものとも知れぬ唐突な記憶の浮上としてそれが起こり、映画の場合は、いつけん時空間が安定して示されているように見えながら、時空間を非連続化する繋ぎ間違い=通常の時空間を安定される編集技法の排除と異化の介入としてそれが示されていた。そして、その結果、いまここにあることによって生じる危機の体験が、時空の混乱によって遠ざけられていることが解明された。

更に第三の点として挙げられるのは、悲劇的要素に日常的な要素を混淆させたり、喜劇的な要素に深刻な要素を重ね合わせたりする手法といえる。これは特に映画の表現として多くみられたものであるが、単なる悲喜劇という枠組みには収まらない齟齬が垣間見えるものとなっていた。しかもそれは、たとえば第二次大戦下の日本の映画であるにもかかわらず、敵国アメリカのミュージカルの手法が露骨に持ち込まれるといった文化混淆的な側面さえもっている。つまり混淆的な手法とは、危機に対して一元的な反応を示すことを回避する効果があるのみならず、敵国となった国の文化の記憶と魅力を観客に想起させる可能性をはらんでいたといえる。

いずれにしても、この三点にわたる抵抗可能性としての表現は、これまでほとんど光を当てられることのなかった問題であり、その点で本研究の重要な成果となっているものと考えられる。ただし、映画に関しては第二次大戦下にあってもこうした表現を含む映画が公開されていたのに対して、文学作品においては、それが戦時下における外国文学の研究として下準備され、戦後に小説として公表されるという傾向を色濃くもっていたことは否めない。しかし、たとえそうではあっても、どちらの場合もこうした諸手法が戦後から現代に至るまで多くの作品に引き継がれており、長い命脈を保っているという点でも、決して無視することの出来ない問題であることは明らかである。

(4) 一方、時空の曖昧化に関わるそれとは異なる記憶の問題として本研究の中で問われたのは、戦争トラウマの問題であった。戦場や戦災の体験が、後になって記憶として想起されることでどんな事態を引き起

こすのか。そうした観点から遂行された探究にあっては、日本の戦後文学と映画における戦争の記憶の問題が、フランスの戦後文学・映画における同種のテーマの追求と通底していることが明らかになった。しかし、アラン・レネの映画『ヒロシマ・モナムール(24時間の情事)』ほどの直接的なトラウマと記憶の関連性を示したもののどの国の作品にも少なく、間接的なものにとどまっているという問題点も明らかになった。またアメリカ映画の『ディア・ハンター』などの帰還兵ものに描かれた戦争トラウマが、自国民の受けた傷にのみ焦点を当てがちな欠陥があることも浮かび上がってきた。日本の戦後文学における戦争の記憶についてもこうした傾向があることは否めないが、トラウマが後に記憶として再生されることによって固定化することを考え合わせれば、日本の戦後の文学と映画の記憶の表現には、そうした固定化を避ける表現が多く見られる点で、トラウマ化を超えた記憶再生の可能性が呈示されており、それが戦後フランスの映画や文学と通底する重要な要素であることが解明された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

中山昭彦「地軸を狂わす飛翔 宮崎駿論」、『ナイトメア叢書8「天空のミステリー」』、122-134頁、2012年、査読無、

佐藤淳二「<啓蒙>の臨界()」、『層』4号、68-94頁、2011年、査読有

城殿智行「五〇年代の日本映画」、『社会文学』33号、170-172頁、2010年、査読無

中山昭彦「面の混濁(上)」、『層』3号、174-194頁、2010年、査読有

応雄「德勒茲《電影2》読解：時間影像與結晶」、『電影芸術』19巻8号、96-104頁、2010年、査読有

中山昭彦「離接と放射 小津安二郎と女優たち()」、『層』2号、87-96頁、2008年、査読有

[図書](計6件)

十重田裕一編、中山昭彦(共著)『横断する映画と文学』森話社、2011年、286頁

中山昭彦他編『少女少年のポリテクス』青弓社、2009年、286頁

十重田裕一『「名作」はつくられる 川端康成とその作品』NHK出版、2009年、174頁

応雄他編、中山昭彦(共著)『中日影像文

化的地平線』中国電影出版社、2009年、225頁

中山昭彦編『ヴィジュアル・クリティシズム』玉川大学出版部、2008年、345頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山昭彦(NAKAYAMA AKIHIKO)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：80261254

(2) 研究分担者

佐藤淳二(SATO JUNJI)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30282544

十重田裕一(TOEDA HIROKAZU)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40237053

応雄(YING XIONG)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50322772

城殿智行(KIDONO TOMOYUKI)

大妻女子大学短期大学部・文学部・准

教授

研究者番号：00341925